



気象暴走の地球

CO₂ 温暖化脅威説の嘘？

今年の夏の暑さは尋常のものではなかったが、7月の末ごろになって、それが北半球全域に及んでいることを知った。

世界気象機関(WMO)によると、中東オマーンでは夜間の最低気温が42.5℃。普段7月の最高気温が22℃程度のスウェーデンでも30℃超えが珍しくなかった。同国内では全土で50ヶ所以上の森林火災が発生。WMOは今夏の猛暑や豪雨といった、異常気象の増加は「気候変動の結果だ」としている(朝日2018/7/25付)。

スペイン、ポルトガルでは8月前半気温が46℃を超え、ギリシャは48℃に迫る勢い。フランスでは複数の原子力発電所で、冷却水用の河川の水温上昇で原子炉の運転が一時停止された(下野 2018/8/6付)。

7月27日にはWMOは世界各国で起きている熱波により、米国西部、南欧、北極圏などで山火事が多発し、大量の二酸化炭素が放出され、「地球温暖化を進行させる懸念もある」と指摘した。これまで報告例のなかった北極圏では、今年シベリアや極東地方で推計9万ヘクタール以上が被災し、このロシアで起きた火災の煙がカナダ北西部でも観測された。米国では7月29日現在で、約70の山火事が延焼中。150万ヘクタールを焼失、西部全域が煙害に見舞われているという(下野2018/7/29付)。

筆者は気候変動について本誌に二度ほど拙文を記した(第39,40号)が、正直、科学的な素養も何もない、門外漢にはこんな大問題は手に余ると考えてきた。だが最近友人に教えてもらったブログで、「地球温暖化」の原因を二酸化炭素の増加に求める、現在の定説は誤りだとする、樋田敦氏の論説を知った(「東海アマブログ」…「異常気象の原因(08・02)>「CO₂温暖化脅威説は世紀の暴論—寒冷化と経済行為による森林と農地の喪失こそ大問題—」1998.12.22 名城大学商学部 樋田敦)

20年も前の講演のレジュメらしいが、このレジュメは「定説」を論破する正論であり、現在の地球環境問題の核心を突く重要な問題提起ではないかと思われるので、少々長くなるが、その一部を紹介しておきたい。

樋田氏はCO₂温暖化脅威説を「11の事実」から否定している。

まず、多くの研究者は大気中のCO₂濃度の増大が気温を上昇させるとするが、樋田氏は

ハワイのCO₂長期観測者グループの研究によって、それが事実と逆であることが証明されているという(図・1参照)。このグラフが示すように気温の上がった半年～1年後にCO₂が増加している。(事実①)

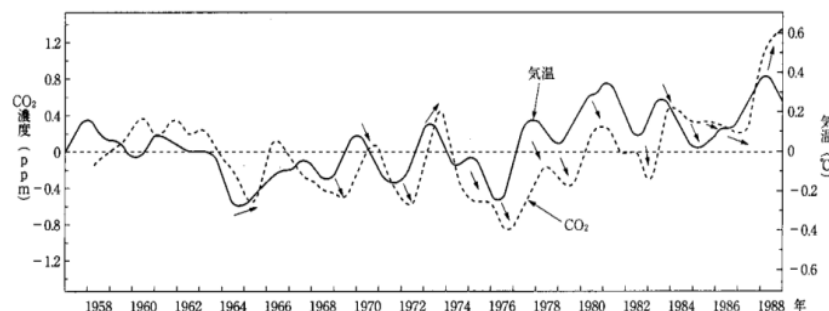
またこれらの研究者たちはエルニーニョ発生の一年後にCO₂が増えたことも発表した。赤道付近の海面温度の上昇がCO₂濃度上昇の原因となっている。(事実②)

したがって、大気中のCO₂濃度の増加で温暖化するのではなく、気温(海面温度)の上昇でCO₂濃度が増えるというべきだとする。また、CO₂温暖化脅威説は、人間の発生させたCO₂が大気中に留まるとする説を前提に組み立てられているが、この説をも樋田氏は事実によって論破している。(事実③④⑤)

さらに、「1992年から2年間、人間がCO₂放出をやめたわけではないのに、大気中のCO₂濃度は全く増えていない。CO₂温暖化説によれば、このCO₂は完全に行方不明ということになる。」(事実⑧) この原因は1991年のピナツポ火山の噴火で、その微粒子が成層圏に放出され、地表の受ける太陽光が減ったからだという。

樋田氏は、こうした事実によって、大気中のCO₂濃度は人間の発生させるCO₂濃度によって決まるわけではないとする。

また樋田氏は「地球環境問題を解くための鍵」として、地球を「開放系の熱学」(いわゆるエンジンの理論)の対象とすることが必要だという。その場合に重要な事項は、入力としての太陽光の受光状態(=どれだけ地表が太陽光で温められているか)、出力としての宇宙への放熱状態、そして地球に存在する物質循環の三点である。



目次:

気象暴走の地球	1
カモシカの道	2
川むしたんけん隊 猪倉・田川	3
イベントのお知らせ 川むし探検隊 ゆったりウオーク	4
活動報告	4

お知らせ

定例会

毎月・第4金曜日

午後1時～2時

参加希望の方は会場・日時をお問い合わせください。

◆ ご協力お願い

毎月11日はイオンの「イエローレシートキャンペーン」日です。半年に一度、レシート合計金額の1%が登録団体にカードで寄贈されます。

当会も登録していますので、11日に買い物した時は「今市の水を守る市民の会」のボックスにレシートを入れてくださるようご協力お願いします。当会の活動に必要な品物を購入させていただきます。

「まず太陽光を15℃の地表で受ける。次に対流圏上空のマイナス23℃で宇宙に放熱する。これによって下が熱せられ、上が冷やされるので対流圏の大気の循環活動が成立する。地表の水と大気中の水蒸気間の循環活動を作る。つまり、地球は空冷と水冷の機能を持つことになる。」「この大気と水の循環は海水の上下運動を発生させ、また養分の循環を作って生態系を成立させている。」(榎田レジュメ・p5～6)

この理論を前提として、大気の循環を阻害する人間の活動を考えると、それは大気汚染ということになる、という。まず可視光と赤外線に対して汚染物質が白い色の場合には、太陽光は宇宙に散乱されるから、気温を降下させる。黒い物質でもそれが成層圏にある場合、その熱は宇宙に放熱されてしまうが、地表に届く太陽光を少なくするので白い汚染と同じく寒冷化をもたらすことになる。

問題は黒い汚染物質が対流圏にある場合である。この場合は深刻な影響を受ける。この部分は重要なところなので、以下、榎田氏のレジュメから引用する。

「太陽光はこの汚染物質に吸収されて、その高度の大気を加熱する。そして、地表に到達する太陽光は減少する。その結果、上が過熱され、下が減熱されることになるので、大気の循環は阻害され、地表は熱平衡に近づく。また、大気循環が滞るため、風が吹かず、水があっても蒸発しない。地球の持つ空冷と水冷の機能を損なうことになる。これは温暖化というよりも、熱地獄である。(事実11)」(同レジュメp.6)

「この現象(事実⑩)は都市気象(ヒートアイランド)として知られるが、これが世界各地に広がっている。インドネシアやブラジルの焼畑を原因とする熱帯林の火災による煙は、赤道上空を覆い、貿易風や積乱雲の発生を妨害して、赤道海面の温度を上げる原因となった。また、北極圏では、工場や航空機の黒い煙による対流圏大気の汚染がある。これは北極圏の気温上昇の一因である。」(同レジュメp.6)

従って現代の最大の環境問題はCO₂の増加ではなく、「農地と森林の喪失」であり、そこから進む砂漠化である、と言う。

「このような農地と森林の破壊こそが大問題であるのに、炭酸ガス温暖化脅威説に振り回され、世界各地の環境悪化の経済的原因を十分に議論する機会が奪われていることは残念というほかない。」というのが榎田氏の結論である。榎田氏は、この「環境悪化の経済的要因」について、かなり詳細に記しているが、ここでは触れる余裕がない。

「東海アマブログ」氏(以下、「アマブログ」氏と省略)もこれを受けて、先進国の温暖化研究は、化石燃料と二酸化炭素だけを悪者にしてきているが、地球環境を破壊して気象の暴走を招いている最大の要因は、商業的森林伐採であり、石炭や、石油の利用拡大は二の次ということではないのかと指摘している。

確かに、「アマブログ」氏も言うように、これは現在の地球環境問題を考える上で極めて重要な問題提起ではないだろうか。大森林帯の役割は「気象緩衝作用」にあると考えるのは常識的にも納得できる話である。森林は地表を極端な暑さ寒さから守る地球の快適な衣類のようなものであろう。その大切な衣類が、金儲けだけが目的の連中に、どんどん剥ぎ取られているというのが現状である。その結果、「地表には極端な寒暖差と、日照や吹雪や砂嵐や、台風、突風、竜巻が襲いかかり、これまで樹林帯によって守られてきた地表の生き物たちは、気象暴走の直撃を受けるのである。…地球はまさに全土を砂漠化しようとしている。」(「アマブログ・異常気象の原因」より)

また「アマブログ」氏は、『地球温暖化説』を主張する学者たちのグループの背後には国際原子力産業がいて、化石燃料を温暖化の悪者に仕立て上げることによって原子力産業を有利な位置に押し上げたいという思惑が働いていた。」と述べているが、この点は、これまでも、かなり知られていることではある。

そして今回、榎田氏の理論に触れて、私も地球温暖化・二酸化炭素原因説は、『無制限の森林伐採の規制』という最も大切な観点」に大方の関心が集まらぬようにするための、一種のカモフラージュ的な理論としての役割を果たしているのではないかということに遅まきながら気付いた。

たとえば、アマゾンの熱帯雨林の深刻な事態について、ネット上の百科事典『ウィキペディア』で調べるとWWF(世界自然保護基金)は2030年までに最大で面積の60%が破壊され、この影響で二酸化炭素排出量は555億トンから969億トンに増える可能性があるとの報告を出しているとのこと。つまりは問題がCO₂の数字上の問題に矮小化されているのではなかろうか。

もはや紙数も尽きた。さしあたり、ここでは「アマブログ」氏の結論部分に賛同の意を表して筆をおく。「何はともあれ、熱帯雨林と、ロシア・タイガの無制限の伐採を直ちにやめさせ、自然林を復活させなければ、人類の安全な気象環境は成立しなくなるのであり、今年の夏、日本だけでなく、世界中で起きている過去最悪の異様な猛暑もまた、森林伐採の成果なのである。」(文責・森)

カモシカの道

ゆったりウォークの下見を兼ね、小倉(ごくら)の城山(じょうやま)に登ってきた。戦国時代は板橋の城山(しろやま)・猪倉の城山と共に砦が築かれていた山。行川の右岸から394メートルの頂上へは近年整備されたジグザグの山道が続いており、思ったほど苦しい登りではない。途中、真っ白な傘をもつキノコ(シロオニタケ?)の群生や赤く可愛いキノコ(タマゴタケ?)を見つけ、台風後の山の呼吸を感じた出会いだった。空濠を渡って立った頂上には山神の祠とベンチが置かれているが、めぐりは樹齢を深めた黒木に覆われ眺望は失われていた。かつては板橋城や猪倉城へののろし台の役目を担っていたから、現在とは全く違う明るく開けた景色があったことだろう。眼下に広がる光景をぜひ見たかったのだが、残念。

頂上近くで珍しいドングリを拾った。ふだん見かけているものより大きく、ずんぐりしている。殻斗(かくと)約2cm、実は1.5cmほどで丸みがあり、頭は尖っておらず平ら。帰宅後、少し調べてみたら「フモトミズナラ」という種類らしい。頂上から尾根伝いに足を進めると、鹿沼の板荷に出るコースがあり下っていくと、100メートル下の林に生き物の姿が――。立ち止まって確かめようとしている私達に向かって、相手も全く動かない。望遠鏡を持参しなかったことがここで悔やまれた。登り口に猪除けの金網が設置されていたことを思い出し、「もしかして、猪?」とちょっと怖さも覚えたのだが、しばらく目を凝らしてみるとそれは脚の長い動物で、茶褐色の顔の周りに白い縁取りのようなものがある。数分間見つめ合ったままだったが、私達はここから先に進むことを遠慮し元の道に戻ることにしたら、相手もやっと動いて木々の間を去っていった。後日、知人から教えられたのだが、見つめ合った相手はカモシカだったらしい。彼らはじっと見る習性があるそうだ。昨春、鶏鳴山登山口近くの沢でカモシカに出遭っているから、今回の個体もその山系から入ってきているのではなかろうか。

戦後植林された杉・檜が国の施策に翻弄され、伐採期をどうに越している山もあるそうだ。今後はこれらの山の木を広葉樹に植え替える計画があるらしい。保水力をもつ丈夫な山として、また動物達の食べ物も供給する山として人間と動物達との住み分けができれば、日本の山は元気になれるだろう。今回ほんの数時間の登山だったが、小倉の城山が提供してくれた情報はこれからもしっかりと頭に焼き付けていきたい。

10月20日土曜日、小倉城山への「ゆったりウォーク」。ひょっとするとカモシカが待っているかもしれませんよ。会員の皆さん、ぜひご参加ください。(塚崎)

たくさん目と手で

猪倉・田川の「川むしたんけん」より

7月25日(水)、NPO法人和音の「放課後児童クラブ・夏休み恒例行事」に当会が協力。猪倉・泉福寺下の田川、「向の内橋」近くで「川むしたんけん」を行いました。ここ2年ばかり雨天で実施できなかったのですが、今年は連日の晴天・猛暑により川の水位も水量もほどよく、絶好の探検日和となりました。「川むしたんけん」は川の中の生き物の種類とその数によって川のきれいさを誰でも簡単に計ることができる方法です。

当日、「いのくら児童クラブ」の児童達は先発・後発と2つのグループに分かれ、川の中の生きもの探しを行いました。猛暑が続いていることから川に入るのは30分のみとし、網とお皿を渡して自由に探してもらいました。大人数でしたが、事故もなく行うことができました。丁度、7月前半に授業で川に入っていた4年生は虫の名前をしっかりと覚えている児童もいてこちらがびっくりさせられましたが、嬉しいことでもありました。総勢70名近く、たくさん目と手でいろいろな生き物が見つかりました。



7月25日(水) 10:00~11:00

気温30℃・水温20℃ 流れの速さ10cm/秒

環境省の定めた指標生物の中から下記の生き物が見つかりました。

水質階級Ⅰ(きれいな水) ウズムシ、沢ガニ、ヒラタカゲロウ、カワゲラ

Ⅰ~Ⅱ(きれいな水) ヒゲナガカワトビケラ、

タニガワカゲロウ、チラカゲロウ

水質階級Ⅱ(ややきれいな水) カワニナ、コオニヤンマ(幼虫)、オオシマトビケラ、ゲンジボタル(幼虫)

水質階級Ⅲ(きたない水) ミズカマキリ

水質階級Ⅳ(とてもきたない水) いない



以上の生き物の種類からわかることは、向の内橋下の水質は「きれいな水」と「ややきれいな水」が一緒に流れているということです。他の生き物も；サナエトンボ、オニヤンマ、コヤマトンボ、ガガンボ(いずれも幼虫)、ミズムシ、アオハダトンボ(成虫)、カジカ(魚)、スナヤツメ(魚)、他の稚魚多数・白鷺(鳥)です。



田川は日光市七里の山中の泉が源です。途中で沢水や田の用水、人間の生活用水を加えて猪倉まで流れてきています。向の内橋周辺は両岸に葦原などがあるため水の浄化もされており、多くの生き物達も生きやすくなっているのだと思います。今回、ゲンジボタルの幼虫が見つかっており、カワニナも沢山いることから、蛍の群舞もあり得ることでしょう。見たいものです。

水田が広がり遠景に日光連山を眺めることのできる猪倉の田川は、子供達の好奇心を引き出すのみならず、私達大人にとっても気持ちを鎮めてくれる良い川です。皆さん時間の取れた時、ゆっくり田川を眺めに来てください。(塚崎)





活動報告

- 3月23日(金) 定例会
- 6月22日(金) 定例会
- 7月25日(水) 田川での川むしたんけん
(NPO和音・いのくら児童クラブ)
- 7月27日(金) 定例会

郵便振替口座 00140-4-535550

〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方
今市の水を守る市民の会
0288-27-2183 (8時~17時:森)
0288-26-3324 (17時~21時:塚崎)
<http://www.somesing.net/daiyagawa/>

今秋、水の会イベントのお知らせ

ゆったりウォーク(小倉編)

10月20日(土)

秋の声 伝える 古き山城へ

戦国時代の山城に登ったあと、日光市の無形民俗文化財(弓取り童子)に指定されている三所神社を参拝。

約7km歩きます。

日程: 午前9時 集合 ~ 午後1時頃 解散

集合: 大和木材工業・駐車場(東武日光線 下小代駅近く)

川むしたんけん隊



今市の水を守る市民の会
NPO法人 なんとなくのこわ

川の中にはどんな生き物がいるかな?のぞいてみよう!
おさかな: ヤマメ、ウグイ、カジカ
かわむし: カゲロウ、トビケラ、カワゲラ、ヘビトンボ
川の中に入り、川むしをさがしてなまえをしらべたり、お話をきいたりします。



10月6日(土)
午前9時30分 集合
落合西小 近くの 長畑川



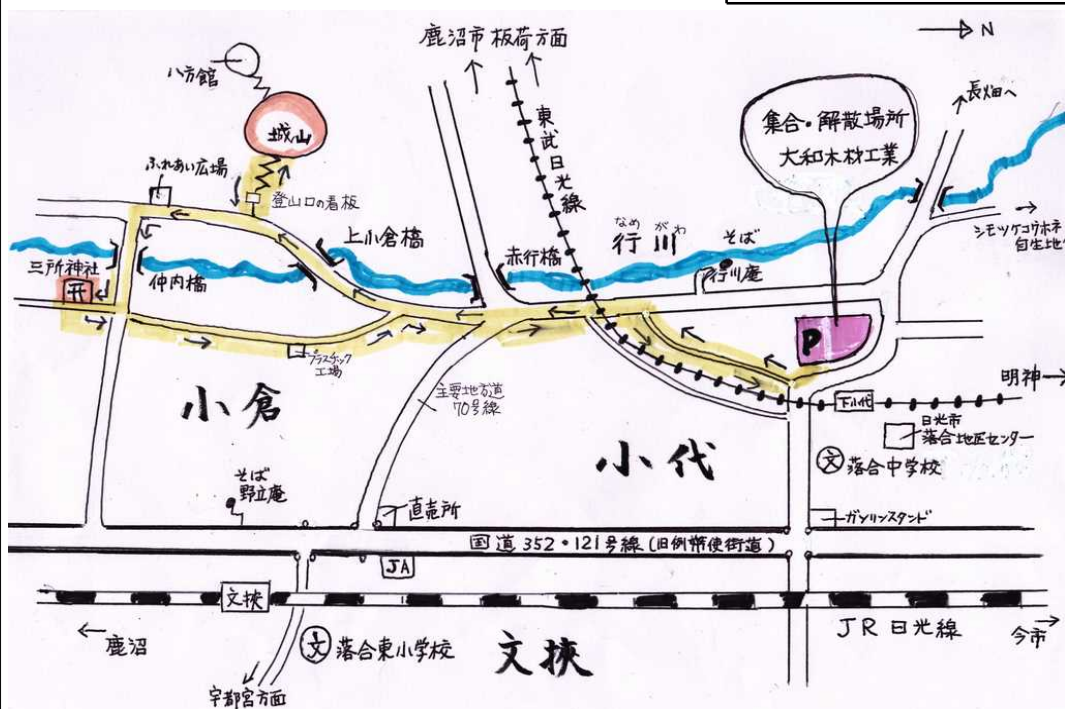
■ 日程

日光市・落合西小そばの長畑川
採取の説明と川に入る注意
川に入り、川むし採集
川むしについての説明・解散
昼食は各自ご用意ください

■ 雨天中止

- 小学生は大人同伴をお願いします。
 - 参加費: 100円(保険料など)
 - 川に入れる服装で(川底は滑ります)
- 靴・着替え(お持ちなら: 虫めがね、ピンセット、箱めがねなど)

参加申し込み・お問い合わせ
090-3227-7079
(NPO法人 なんとなくのこわ)
Mail: info@nantonakuno.net
FAX: 0288-21-2631



編集後記

焼却灰の放射能はもとの木材に比べ約200倍濃縮されるという情報を知り、昨年冬、栗の落葉を集めて燃やし灰の放射能を測定したことがあります。栗落葉灰の放射性セシウム濃度は約1.4kBq/kgでした。逆算すると栗落葉はおよそ7Bq/kgの放射能を持つはず。枯葉に含まれる放射能は樹皮から移動したのだろうか根から吸い上げたセシウムなのだろうかと考えながらグラフを眺めていて、おかしな「山」に気づきました■放射能測定器の多くはガンマ線という放射線を検出し、エネルギーごとの計数を手掛かりに放射エネルギーを推定します。特定の放射能が含まれば対応するエネルギー値に信号が見つかり、その量で濃度がわかります■いままで見たことのないエネルギー信号。何だろうと思いながら数か月が過ぎ、分解能の高いゲルマニウム半導体検出器での測定をお願いすることにしました。結果リストによると「山」の正体は477keV(キロ電子ボルト)のガンマ線を出す⁷Be(ベリリウム7・原子番号4)という放射性同位体でした。確認のため、4月半ばに同じ栗落葉灰を再測定してみたところ信号は消えていました■⁷Beの半減期は約53日。前回の測定より130日経ったということは約80%の⁷Beは崩壊し、ガンマ線量はおよそ1/5に減少したはず。昨年12月に見つけた「山」が4月には消えてしまったことが説明できます■思いがけず、⁷Beに出会ったお話でした。この放射能は「大気上層の酸素および窒素が宇宙線による核破砕を受けて」作られ、雨などで地表に降ってくるそうです。興味を持たれた方は https://www.gsj.jp/data/gcn/gsj_cn_vol3.no12_357-365.pdf をご覧ください。(T)